

小学校体育における社会性の育成に関する考察

スポーツ科学研究領域

3804C079—1 眞榮里耕太

研究指導教員：寒川恒夫教授

本研究は、体育の授業で取りあげられる目標の中で特に「社会性の育成」に焦点をあてる。体育では、「体力の向上」や「運動技能の向上」と並んで「社会性の育成」が、目標として示されている。

近年、学校内外において少年犯罪や「いじめ」「不登校」「学級崩壊」「暴力行為」の数が依然として高い割合を保っている。いずれの問題にせよ、子ども自身の自己中心的な考え方や、他者とコミュニケーションが上手く取れないといったことが、主たる原因として考えられる。体育では、教科の特性上、他人と関わることを必然としているため、子どもの社会性の育成に効果的であると考えられている。本研究では、体育において社会性の育成することの有効性に着目し、このテーマを設定した。

序章

学校教育は、戦後の民主的な人間を育成することが主たる目標とされて以来、子どもの社会性を育成し、民主的な社会人として育てることが、一貫して目標とされてきた。体育についても、目標の中に一貫して身体的なものと共に社会性の育成が取りあげられてきた。時代によって強弱はあるが、社会性の育成が一貫して取りあげられていることは、教科として重要な柱として考えられてきたことを示している。

体育では、スポーツが主たる教材として扱われている。これまで、スポーツを行ってさえいれば、ルールやマナーを遵守し、その結果として自然と社会性が身につくと考えられていた。そのため「何を(教材)どのよう(学習方法)に行えば、社会性が

形成されるか」という明確な方法論は明示されていない。このような考え方に疑問をもちながらも依然として実践されている現状がある。

そこで本研究では、体育授業を通していかに社会性の育成がなされているかを過去の実践から考察する。また、評価すべき点や改善点を見分け、今後の体育現場での実践に役立たせるために行う。

1章 社会性の育成の変遷と歴史的背景

戦後学校体育は、学習指導要領の目標の重点の置き方の違いから、「新体育」「技能主義・体力主義」「楽しい体育」と3つに区分することができる。

「新体育」の時代は、戦前の軍国主義教育からの脱却を図るために民主的人間の育成をすることが教育界の目標となった。それにともなって学習方法も戦前の教師による一斉学習から子ども中心の問題解決学習(主として生活体育)に変更された。

ここで代表的な研究者として竹之下休蔵と丹下保夫に注目した。前者は、「全国学校体育研究協議会」を設立し、後者は「学校体育研究同士の会」を設立した。同時代でともにグループ学習を用いながら対照的な研究を行った。竹之下は、当初、話し合いの重要性をあげていた。しかし、子どもの話し合いによる学習の効率の悪さから教師の立てた計画を子どもたちに「うつす」ことでグループ学習を進めた。一方丹下は、教師の立てた計画を子どもたちに提示し、その計画を批判検討させよりによくするために「話し合い」を重視した。両者とも

に多くの実践を残している。

「技能主義・体力主義」の時代は、技能の系統性や体力向上を目的とした体育が行われ、社会性を育成するための体育実践がほとんど行われていない。

ここで注目するのは浅井浅一である。浅井は、集団構造の研究を行い主に遊戯や体育などの運動を行っている際の集団について研究を行った。そこで①共通目標、②同志感情、③社会秩序、④集団領域、⑤リーダー、⑥ルール、⑦社会的役割の7つのカテゴリーを設定し集団の構造の分析を行った。そして社会性を育成していくうえで集団の有効性を主張した。

「楽しい体育」の時代では、スポーツそのものを楽しむことが目的とされた。

ここでは、出原泰明の異質協同学習に注目する。出原は、「楽しい体育」で頻繁に用いられた同質集団による学習に対して批判的にとらえ社会性を身につけるためには異質な集団のほうが適していると考えた。また、技能習熟の面でも同質の集団よりも異質の集団のほうが適していると考えた。

2章 体育授業における社会性の育成への取り組みと問題点

「社会性の育性の目標」は、「運動技能の目標」「認識学習に関する目標」そして「情意目標」との関係を保ちながら役割を果たしていく必要がある。

だが、これまで「社会性の育成」は、重要な目標とされていながら、スローガン化、形骸化してしまっている。その理由として、明確な指導方法が示されてこなかったことが挙げられる。

このような状況をうけ、近年、子ども同士の関わり

あいを重視し、社会性の育成を目標にした実践研究がなされてきた。ここでとりあげるものは、「スポーツ教育モデル」や「チャレンジ運動」「質問紙法による調査」を使用した実践である。

3章 今後の社会性を育む体育授業の構想

社会性を育むための体育授業の構想として「体育授業の方法」「技能との関係」「教師の手立て」の3点に絞り体育の授業を構想していく。

体育では、スポーツによって多くの経験を得ることができる。これを生かし体育授業をつくりあげていく必要がある。

社会性を育むための体育授業として「体育授業の方法」「技能との関係」「教師の手立て」の3点に絞り構想を進める。

まず「体育授業の方法」は、学習形態や教材を工夫し、関わりあいの学習内容に組み込むことが考えられる。

「技能との関係」は、技術のポイントを明確に示すことで子ども同士の関わりを促すことができる。

「教師の役割」として①明確な授業の目標やめあてを子どもに対して提示すること、②子ども同士が関わりあうことを学習内容として授業に取り入れること、③教師が子どもたちに対して肯定的な関わりを行うこと、の3点があげられる。

結章

本論をまとめ、今後の課題と展望として、社会性が育成されたといえる具体的な行動基準の規定を行い、評価していくことが今後の課題としてあげられる。また、ここであげた社会性の育成をする体育授業の構想を実践し新たな方法を模索していくことが今後の展望である。